

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13574

研究課題名(和文)古墳時代中期王権中枢部における埴輪生産体制の実証的研究 奈良市佐紀古墳群を中心に

研究課題名(英文)The Empirical Research for the Haniwa Production System in the Heartland of the Yamato Polity in the Middle of the Kofun Period: especially in the Saki Tomb Group, Nara

研究代表者

大澤 正吾 (OSAWA, SHOGO)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：40710372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：ウワナベ古墳は佐紀古墳群東群に属する古墳時代中期の超巨大古墳である。1969～1970年に中堤の一部が発掘調査され、100本を超える埴輪が原位置で取り上げられた。しかし一部の資料を報告するにとどまっており、再整理と成果の速やかな公表が求められた。そこでこれらの埴輪を整理・検討し、写真図録を作成した。

また、佐紀古墳群東群に埴輪を供給したと目されてきたものの、実態が不明な部分が多かった東院下層埴輪窯跡群についても検討を加え、佐紀古墳群東群の巨大古墳造営開始を契機に開窯、その造営停止により生産を終了しないし縮小し、中小古墳への広域供給を目的とする菅原東埴輪窯へと埴輪生産の中心が移ったと理解した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ウワナベ古墳という王陵級巨大前方後円墳から出土した埴輪について、写真図録という形ではあるものの、これまで整理の都合上、検討されてこなかったものを、およそ半世紀を経て今回公表した意義は少なくなく、埴輪群構成や工人編成を検討するための基礎的な資料を提供するものである。また、注目されてきたものの実態が不明な部分も多かった平城宮東院下層の埴輪窯跡群について、発掘遺構と出土資料に検討を加え、操業期間や佐紀古墳群東群への供給関係などに基礎的な理解を得た。これらの成果は、古墳時代の学術研究に広く基礎的な資料を提供し、研究の進展を下支えするとともに、展覧会などでの文化財の活用にも資すると考える。

研究成果の概要(英文)：Uwanabe tomb is one of the super big tombs, and belongs to the east cluster of Saki tomb group. It was excavated in 1969～1970, and over 100 Haniwa were excavated. But only some were reported. Nowadays, immediate study and report of these Haniwa are needed. Hence, I researched these Haniwa, and made the catalog of them.

Moreover, I researched the Haniwa kiln sites under the east palace sector of the Nara palace site that are estimated to supply Haniwa to the east cluster of Saki tomb group, but not fully studied regardless of its importance. I concluded that these kilns began to operate, triggered by the start of the construction of the super big tombs in the east cluster of Saki tomb group, and stopped operation or sharply downsized as a result of the end of the construction of the super big tombs in this tomb group, then center of the Haniwa supply were moved to East Sugawara Haniwa kiln sites in order to supply Haniwa more widely to middle and small tombs.

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代 埴輪

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

古墳時代の研究では、「王陵級」と呼ばれる超巨大古墳の様相把握が最も重要である。奈良県奈良市に所在するウワナベ古墳は墳長全長 270～280mと推定される、古墳時代中期の超巨大古墳である。中堤の一部を奈良国立文化財研究所が 1969～1970 年におこなった平城宮第 54 次・第 60 次調査において発掘調査し、100 本を超える埴輪が原位置で取り上げられている。王陵級古墳の様相を詳細かつ具体的に知ることのできる好例である。しかし、発掘調査報告書である『平城報告』(町田編 1975)では、整理の都合上、出土した埴輪すべてを検討することはできず、遺存状態の良好であった普通円筒埴輪 1 点、鱗付円筒埴輪 3 点、船の線刻がある鱗付円筒埴輪 1 点、蓋形埴輪 1 点について選択的に報告をおこなうにとどまり、全体の埴輪群構成を知ることはできないため、資料の再整理とその成果の速やかな公表が求められた。

また、コナベ古墳、市庭古墳、ヒシャゲ古墳といった佐紀古墳群東群における他の王陵級超巨大古墳や、平塚 1 号墳、平塚 2 号墳、大和 5 号墳といったウワナベ古墳周辺の古墳についても調査が及んでおり、ウワナベ古墳出土資料の整理を起点として、佐紀古墳群東群における埴輪群組成や埴輪の生産・供給関係の一体的な比較検討も射程に入る点で有利であると考えられた。そこで中途より、佐紀古墳群東群に埴輪を供給したと目されてきた平城宮東院下層埴輪窯跡群も整理・検討の対象に加えることとした。

### 2. 研究の目的

本研究では、ウワナベ古墳出土埴輪を中心に佐紀古墳東群出土埴輪の整理・研究を通じて、古墳時代中期の王陵級古墳における埴輪群組成の実態をあきらかにすることを目的とした。

そこで、3つの目標を設定した。第一の目標は、ウワナベ古墳出土埴輪の整理をおこない、その全体像を公表することである。悉皆的な器種同定および接合検討により器種組成などの基礎的整理をおこなったうえで、同工品分析をおこない埴輪工人編成の把握を目指した。

第二の目標は、佐紀古墳群東群に埴輪を供給したと目されてきたものの、その実態が不明な部分が多い平城宮東院下層埴輪窯跡群について、基礎的な検討をおこない、埴輪窯跡群の操業期間や供給先をあきらかにすることである。

最終的な目標として、これらの整理・検討を総合し、畿内中枢部における埴輪生産体制の時系列的な変化とその背後にある王権による労働力編成の在り方を実証的に論じることを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究の中核は、ウワナベ古墳から出土した埴輪類の整理によって、その実態を明らかにし、古墳時代研究に必須の情報を公開することである。対象資料の大半が未整理の状態であったため、洗浄と接合、および資料化をおこなう必要があった。資料化に際しては、写真撮影や手実測による図化に加え、三次元計測やそれを利用した高精細オルソ画像を用いた。これらの基礎的な作業をおこなったうえで、個体ごとの属性の抽出をし、同工品分析をおこない、工人編成を復元することを目指した。

また、東院下層埴輪窯跡群の検討に際しては、発掘遺構自体の検討をおこない、各窯の構造と埴輪の出土層位を再検討することで、各窯に確実にともなうと考えられる埴輪を抽出した。そのうえで各埴輪を分析、図化し、佐紀古墳群東群を構成する主要な超巨大古墳出土埴輪との形態的な類似性を主な手掛かりとして、供給先古墳と埴輪窯の操業期間の実態解明を目指した。

### 4. 研究成果

#### (1) ウワナベ古墳出土埴輪の公表

中堤 平城宮第 54 次・第 60 次調査においてウワナベ古墳から出土した埴輪について、第 60 次調査 L 区中堤外周埴輪列を中心に写真図録を作成した(図 1)(大澤 2022)。普通円筒埴輪、鱗付円筒埴輪、蓋形埴輪、不明形象埴輪を確認した。埴輪列で原位置を保って出土した円筒埴輪・鱗付円筒埴輪のうち、底部から口縁部まで接合できたものには、既報告の 4 点のほか、新たに接合できた 2 点がある。2～3 段目付近まで復元できたものに 24 点があるが、最も数が多いのは底部から 2 段目まで付近のみ接合したもので 71 点がある。

円筒埴輪のうち、3 段以上遺存するものには基本的に鱗が確認でき、ウワナベ古墳中堤外周をめぐる埴輪が鱗付円筒埴輪を基調とすることが改めてあきらかになった。口縁部まで接合できた鱗付円筒埴輪は、いずれも 6 条 7 段、折曲口縁で口縁部高は幅狭となる。外面調整は一次調整のタテハケののち、二次調整に B 種ヨコハケを施すことを基本とする。B 種ヨコハケには B b 種、B c 種、B d 種を確認した。透孔の形状には円形、半円形、長方形、小三角形がある。

透孔の配置については、2 段目ないし 3 段目に円形透孔を、4 段目と 6 段目に長方形透孔を、鱗に正対する位置に各 2 孔ずつ配し、5 段目と 7 段目(口縁部)に小三角形のみを 4 孔、あるいは、小三角形と円形の透孔を組み合わせた 4 孔を千鳥に配することを基本とすることがあらためてあきらかになった。しかし、4 段目以上の透孔配置が共通するものでも、円形透孔の位置が 3 段目と 2 段目で異なり、また、5 段目以上が共通するものでも、4 段目に円形透孔が加わるものや、4 段目以下の透孔が鱗に対して正対しないものがあるなど、透孔の配置は完形にまで接合

できた6個体それぞれで、基本は共通しつつもわずかず異なっていた。ウワナベ古墳の埴輪製作への数多くの埴輪工人の関与をうかがわせるものと理解できる。

造出 『平城報告』では、周辺の分布調査により墳丘造出裾周辺で採集した須恵器と少量の土師器片、魚形や棒状の土製品模造品が報告されていた。整理に際し、これらとともに採集された鱗付円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪を確認し、これらを報告した(図2)(大澤 2018・2022)。

#### (2) 東院下層埴輪窯の基礎的検討

東院下層埴輪窯跡群について、帰属時期を決定するため、確実に各窯にともなうとみてよい1号窯床面付近出土資料と5号窯灰原出土資料について、資料を提示した。1号窯は川西編年 期、5号窯は 期の埴輪が主体で、TK23~47 型式の須恵器とともに少量 期の可能性がある埴輪を含むことを示した。そして、1号窯製品の供給先の一つがコナベ古墳であることがほぼ確実視され、埴輪生産の開始が佐紀古墳群東群の築造開始を契機とすること(加藤・大澤 2020)、5号窯製品にウワナベ古墳出土埴輪の類品が含まれること、ウワナベ古墳には類品を求め難く、 期のうちでも時期が下るものが含まれることを指摘した。

この操業の中心時間幅は、コナベ古墳・市庭古墳・ウワナベ古墳・ヒシャゲ古墳という佐紀古墳群東群の巨大古墳の消長と重なっており、形態的な特徴からも東院下層の埴輪窯は基本的にはこれら巨大古墳の埴輪生産のためのものだったと考えた。そして、佐紀古墳群東群での古墳造営が終了すると、東院下層の埴輪窯もその生産を終了あるいは縮小し、入れ替わるように埴輪生産の中心地が菅原東窯跡群へと移動する。TK23~47 型式期に開窯する菅原東窯跡群の製品は、それまでに比して広域流通することが知られており、巨大古墳向けの生産から、中小古墳への広域供給を目的として、菅原東窯跡群へと生産地が変化したものと理解した(大澤 2021)。

以上、王権による労働力編成の在り方までは及ばなかったものの、佐紀古墳群東群における埴輪生産体制を検討するための基礎的な整理と検討をおこなうことができた。

#### 引用文献

- 大澤正吾 2018「ウワナベ古墳造出裾 周辺採集の埴輪」『奈良文化財研究所紀要 2018』奈良文化財研究所 pp.48-49  
大澤正吾 2021「平城宮東院下層埴輪窯跡群の基礎的検討」『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会 真陽社 pp.49-58  
大澤正吾 2022『ウワナベ古墳出土埴輪図録 - 平城第60次調査L区 中堤外周埴輪列 -』奈良文化財研究所  
加藤一郎・大澤正吾 2020「平城宮東院地区における埴輪生産の契機と供給先」『奈良文化財研究所紀要 2020』奈良文化財研究所 pp.12-13  
町田 章編 1975『平城宮発掘調査報告』奈良国立文化財研究所



図1 ウワナベ古墳中堤出土埴輪



図2 ウワナベ古墳造出出土埴輪・土器・土製品

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大澤正吾	4. 巻 -
2. 論文標題 平城宮東院下層埴輪窯跡群の基礎的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古墳文化基礎論集	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤一郎・大澤正吾	4. 巻 2020
2. 論文標題 平城宮東院地区における埴輪生産の契機と供給先	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2020	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤正吾	4. 巻 2018
2. 論文標題 ウワナベ古墳造出裾周辺採集の埴輪	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要2018	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大澤正吾	4. 発行年 2022年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 40
3. 書名 ウワナベ古墳出土埴輪図録 - 平城第60次調査L区 中堤外周埴輪列 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------